

史  
学  
第五五卷  
第一・三号  
一九八六年一月

発行者 三田史学会会員 田村晋水野修 印刷所 水木明 著者 大学文庫研究室  
（〒108）東京都港区三田二丁目五番五号 京大文庫研究室  
株式会社 一内一五三明五三明一書会

定  
価  
二二〇〇円

VOL. LV

1986

NOS 2・3

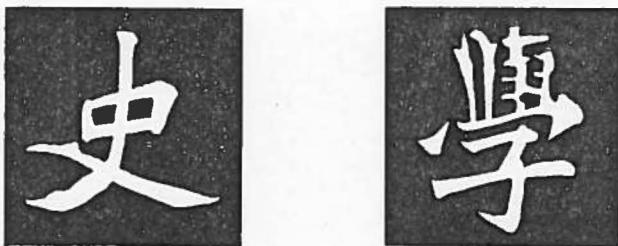
## SHIGAKU

(THE HISTORICAL SCIENCE)

### Articles

- Reconstructing Site Relationships in Prehistoric Japan,  
with Special Reference to the Stylistic Analysis  
of Jomon Pottery.....Junko HABU (1)
- “Bastard Feudalism” under the Reign of Edward II  
.....Kazuhiko UEJIMA (31)
- Church and State in the Civil War of King Stephen:  
The Arrest of the Bishops in 1139 and its Consequences  
.....Kenji YOSHITAKE (71)
- On the Origin of the Rennellese Culture and its  
Isolation .....Masashi CHIKAMORI (105)
- Activities of the Oyama Clan in the Early Namboku-cho  
Period, with Special Reference to Hidetomo and  
Tomouji Oyama .....Kazuo MATSUMOTO (117)
- Hyakusuke Fukuzawa's Chinese Poems «Koikudo-Shiko»  
Translated with Annotations, V .....Ichiro SATO (131)
- Book Reviews .....(141)
- Miscellaneous .....(152)

Edited and Published by  
Mita-Shigaku-kai (The Mita Historical Society)  
Faculty of Letters, Keio University  
2-15-45 Mita, Minato-ku, Tokyo, Japan 108.



## 第五五卷 第二・三号

縄文土器の類似度 ..... 羽生淳子 (1)

—土器の属性分析に基づく遺跡間  
の関係復元への新たな試み—Edward II 治世期に於ける “Bastard Feudalism”  
—Lancaster 伯 Thomas の事例を中心にして—

..... 上島和彦 (31)

スティーヴン治世期王位継承の内乱における教会と国家 (上)

—1139年の司教逮捕事件とその結末—

..... 吉武憲司 (71)

レンネル島文化の起源と孤立性 ..... 近森正 (105)

南北朝初期における小山氏の動向 ..... 松本一夫 (117)

—特に小山秀朝・朝氏を中心として—

福沢百助著『果育堂詩稿』(五) ..... 佐藤一郎訳注 (131)  
福翁自伝を読む  
会・諸家補注

## 批評と紹介

John V. A. Fine, *The Ancient Greeks; A Critical History*,  
Cambridge, Massachusetts, and London, 1983.

..... 真下英信 (141)

Christof Dipper, *Der Deutsche Widerstand und die  
Juden*, in: *Geschichte und Gesellschaft* 9, 1983.

..... 原信芳 (148)

## 摘要

山田忠雄氏提出学位請求論文審査要旨

「一揆打殺し研究序説」 ..... (152)

慶應義塾大学文学部内

三田史学会

## 縄文土器の類似度

—土器の属性分析に基づく遺跡間の関係復元への新たな試み—

羽生淳子

### はじめに

本稿は、縄文時代における居住形態の復元を試みたものである。

筆者は、先に「縄文土器における文様・形態の類似と相異」(羽生一九八四)において、土器の文様・形態にみられる遺跡間の類似度が、それらの遺跡の形成にかかわった集団相互間の関係を検討する際に有効であるとする考え方を示した。そして、その中で、目的にかなった類似度の比較を行なうために予め考慮すべき分析上の諸問題について論じ、具体的な資料を用いた分析事例については別稿でとりあげる予定であることを述べておいた。そこで、本稿では、この問題に関する具体的な分析を行ない、得られた結果に基づいて遺跡間の関係の検討を試みることによって、先の筆者の見通しを具体化しようと考える。

分析対象としては、縄文時代前期後半の諸磯<sup>b</sup>式土器を用いる。この時期を選定した理由は、(1) 諸磯<sup>b</sup>式土器に関する研究が進んでおり、時間的変化の取扱いが比較的容易である、(2) 特徴的な属性が口縁部付近に集中しているため、口縁部個体数に基づいた類似度の算定を行なうことが容易である、等、分析に有利な条件を備えているからである。

実際の分析に先立ち、Iにおいては、諸磯<sup>b</sup>式土器に関する従来の編年研究の成果を概観し、問題点の指摘を行なう。これに基づき、IIでは、具体的な資料を用いて土器の類似度に関する統計的な分析を行ない、IIIでは、得られた分析結果に対する考察を試みる。以上の検討を通じて、得られた知見が、縄文時代の居住形態を考える際にどのような意味を持つのかについて考えたい。

I 諸磯 b 式土器の

## ヴァリエーションと問題提起

1 編年研究の立場からみた諸磯 b 式土器  
者幾式土器の研究史は長く、これを昭和

共通点の第一は、多くの研究者が、深鉢形土器を中心とする分析対象とし、これを、施文技法を中心として、平行沈線文系、爪形文系、浮線文系の三つに分ける視点を示している。

諸磯式土器の研究史は長く、これを紹介した最初の論文は一八九四年までさかのぼる(佐藤・若林一八九四)。しかし、その研究史は、すでに何人かの研究者によって紹介されているので(鈴木敏昭一九八〇a・b、今村一九八二)、ここでは、近年の細分研究の成果を整理し、諸磯式土器の特徴と、その時間的変化に関する筆者の考えを明らかにする。

型式としての諸磯式は、山内清男によつて古い方から諸磯a式・諸磯b式・諸磯c式の三型式に分けられている（山内一九三九）。近年、縄文土器研究における土器型式細

第二の共通点は、細分型式の設定に際しては、各系の内部における型式学的変遷を明らかにした上で、各遺跡

考えを示した（今村一九七七b・一九七九・一九八〇・一九八一・一九八三、鈴木徳雄一九七九、中島一九八〇、鈴木敏昭一九八〇a・b、川崎他一九八〇、白石一九八三、等）。これらの諸論考における各研究者の意見は、細部では異なるものの、全体としてはいくつかの共通点が認められる。

が起り得るわけである。

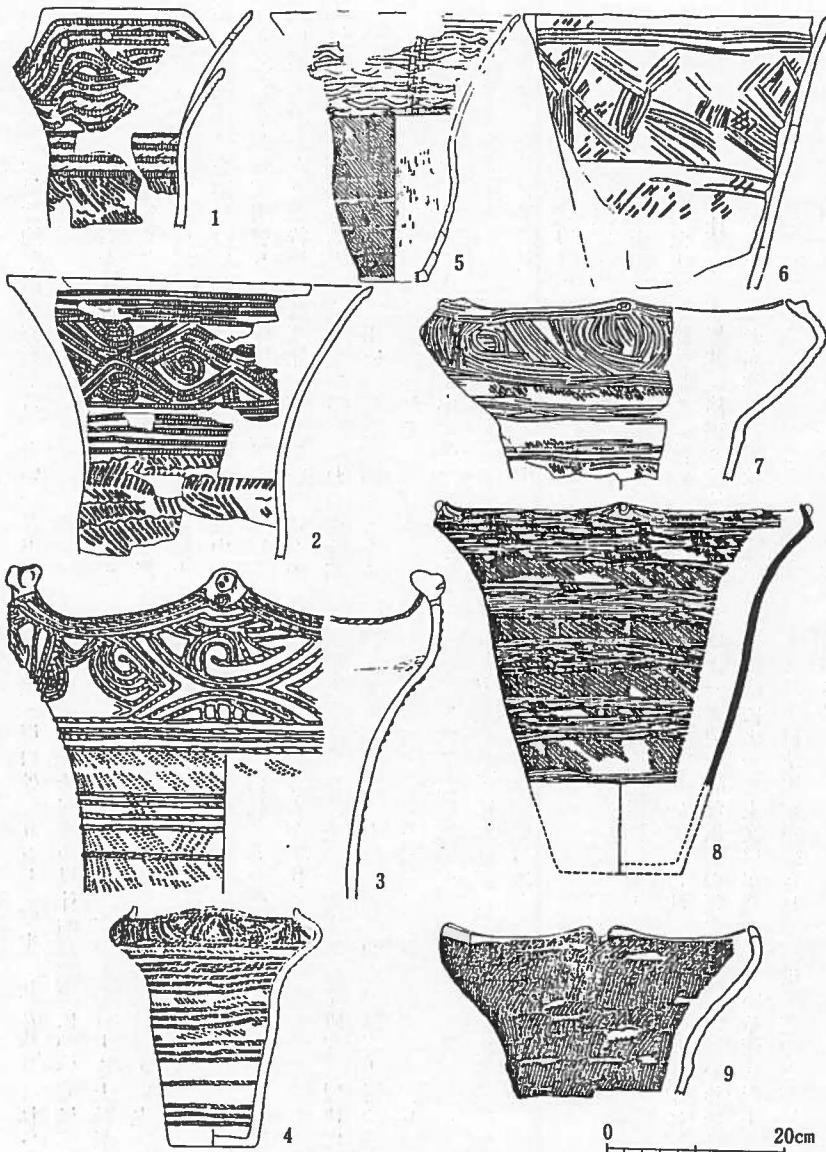
第三の共通点は、研究者の主たる関心が、竹管文や浮線文等によつて器面に丁寧な装飾が施されている深鉢形土器に集中している、という点である。これは、このようない器が型式学的変遷を追うのに最も適しているという理由による。しかしながら、諸磯ら式期の深鉢形土器の中には、この他に、上記のような特徴的な文様を有さない、粗文のみの深鉢および無文の深鉢も含まれている。これらの土器は、編年研究の直接の指標として用いることが困難である。

を占めるようである。

第四の共通点は、編年研究の主眼が時間的変化の把握に向けられており、時間差以外の土器の相異に関する言及が非常に少ない、という点である。近年の型式細分研究以前には、長野県内の諸磯式土器に対する関東と比較した場合の地域差を前提とした上で、南大原式（諸磯 a 式比定）、上原式（諸磯 b 式比定）、下島式（諸磯 c 式比定）といふ型式名が用いられてきた。この名称の差異は、長野県内における編年研究が独自に進められてきたことに起因する（藤森一九五〇、神田一九五一、大場他一九五六、大場

(1) 深鉢形土器（第1図）<sup>(2)</sup>

A 爪形文系土器群（第1図—1・2）  
半截竹管<sup>(3)</sup>を用いて平行沈線を描き、その中に同一施文具によって連続的な爪形の刺突を加えた、いわゆる連続爪形文技法によって主文様が施されている深鉢形土器を本群とする。平行沈線が省略されて、爪形文のみが施される場合もある。



第1図 諸 磯 b 式 土 器  
1.2 鶩沼1住, 3北前1住, 4北塚屋70号土塙, 5多摩ニューコードNo.457.3住,  
6細田9住, 7.9 東光寺裏7住, 8阿久72住

器形は、朝顔形に開くものが大部分を占めるが、ごくゆるいキャリパー形を呈するものもみられる。前者には、平縁ないし二単位波状縁（波頂部がゆるいカーブを示す——第1図—1）が多く、後者には四単位の山形波状縁が多い。胴部は、いつたんゆるくくびれてから開く器形と、直線的に立ちあがり、そのまま上部へ外反するものとがある。

主文様は、口縁部から胴上半部にかけて施され、その上限と下限は横走する連続爪形文によって区画されるのが通常である。区画帯の内部には、全面にわたって曲線的な文様が施される場合と、内部をいつたん三角形ないし菱形に区画し、その中に種々のモティーフを充填する場合とがある。本群は、従来の細分案では、諸磯b式の中でも古い時期に位置づけられている。

#### B 浮線文系土器群（第1図—3・4）

器面に細い粘土紐を貼付する、いわゆる浮線文技法を用いて主文様を施した深鉢形土器を本群とする。浮線上には、ヘラ状工具による刻み目が施されることが多いが、绳文が施されたり、無文のまま残されたりする場合もあり、まれには結節状浮線も存在する。刻み目を有するもの以外

の浮線は、浮線文系土器の中でも相対的に古い時期に位置づけられている。また、新しい時期に位置づけられている資料の中には、粘土紐を貼付せずに刻み目だけを施したものもある。

器形は、四単位の波状縁を有しキャリパー形を呈するものが圧倒的多数を占める。特に、新しい時期に位置づけられる資料では、キャリパー形の彎曲度が強まる傾向がみられる（第1図—4）。

主文様は口縁部付近に集中するが、胴下半部まで数条一組の横位浮線が付されているため、文様帶の下限は不明確である。口縁部付近に施される文様のモティーフは、出現期には蕨手状や弧状のものもみられるが（第1図—3）、最盛期では渦巻文ないしそれに近い曲線图形を充填するのが一般的である（第1図—4）。さらに新しい時期になると、こうした特徴的なモティーフは消失し、横位浮線だけが施されるようになる。

本群の土器は、従来の細分案では、A群よりも相対的に新しい時期に位置づけられている。

#### C 平行沈線文系土器群（第1図—5～8）

半截竹管を用いた平行沈線文技法によって主文様が施されている深鉢形土器を本群とする。

諸磯 b 式の平行沈線文系土器は、平行沈線の幅が広いものと狭いものとに大別できる。前者は器形や文様構成等において諸磯 a 式の延長線上として理解し得るのに對し、後者では浮線文系土器との類似が顯著である。以下に、各々についてその特徴を記す。

### ① 幅の広い平行沈線を主文様とする土器群（第1図—5・6）

平行沈線文系土器のうち、諸磯 a 式の伝統の延長線上に位置づけられる土器を本群とする。具体的には次のような特徴をもつ。

(1) 平行沈線の幅が広い（おおむね五<sup>ミリ</sup>以上）。

(2) 脊上半部文様帶は、脣下半部の細文ないし無文帶から明確に区分される。

(3) 器形は、平縁で朝顔形ないし直線的に開くものが大多するものも存在する。

(4) モティーフは、脣上半部文様帶の内部に三角形や菱形の二次区画を描くもの、斜行線や木葉状の図形を乱雜に描くもの、波状文を数段にわたって施すもの等、多彩である。

本群の土器は、從来の細分案では、おおむね A 群と時間的併行関係にあるものとして位置づけられている。

### D 繩文のみ、および無文の土器群（第1図—9）

器面の全体、あるいは一部に、繩文のみが施されている土器、および、器面に文様が施されていない土器を本群とする。繩文の種類としては、単節 R しと無節しが最も多く見受けられるが、羽状繩文を有するもの等も多い。

器形は、平縁で朝顔形以外反するもの、平縁で、底部から口縁部にむかって直線的に開くもの、平縁で、脣部が張り、いいたんゆるくくびれてからやや外反するもの、四半位の波状縁でキャリバー形を呈するもの、等がみられる。

このうち、朝顔形に開く器形のものは諸磯 b 式の中でも古い時期に、また、キャリバー形の土器はそれよりも相対的に新しい時期に位置づけられると考えられるが、その時間的变化の詳細は明らかではない。

諸磯 b 式に分類される土器としては、前述のような深鉢形土器の他に、少量の浅鉢形土器がある。器形は、底部から口縁部にむかって開くもの、中程で屈曲し算盤玉状を呈するもの、中程でいたんゆるくくびれてから口縁部直下で内轉するもの、等があり、後二者は、口縁部直下に穿孔を有するものが多い。文様は、半截竹管ないしヘラ状工具を用いて木葉状入組文や三角形・楕円形の図形を描くもの、縦文のみを有するもの、無文のもの等がある。赤色塗彩の認められるものも多い。

### (2) 浅鉢形土器

諸磯 b 式に分類される土器としては、前述のような深鉢形土器の他に、少量の浅鉢形土器がある。器形は、底部から口縁部にむかって開くもの、中程で屈曲し算盤玉状を呈するもの、中程でいたんゆるくくびれてから口縁部直下で内轉するもの、等があり、後二者は、口縁部直下に穿孔を有するものが多い。文様は、半截竹管ないしヘラ状工具を用いて木葉状入組文や三角形・楕円形の図形を描くもの、縦文のみを有するもの、無文のもの等がある。赤色塗彩の認められるものも多い。

浅鉢形土器については、時間的変遷、分布、出土状態をもとにその性格を論じた金井正三の研究がある（金井一九七九）。金井は、諸磯 a 式後半期から諸磯 b 式期の浅鉢形土器について、土壙からの完形品の出土例が多いことに注目し、「埋葬に関連する納骨器、あるいは副葬品とも考えられ

### ② 幅の狭い平行沈線文を主文様とする土器群（第1図—17・8）

平行沈線文系土器のうち、器形や文様構成等において浮線文系土器との類似が顯著である土器を本群とする。具体的な特徴を以下に列記する。

(1) 平行沈線の幅が狭く（おおむね五<sup>ミリ</sup>未満）、数条が一単位として施文される場合も多い。

(2) 脣上半部文様帶の下限は不明確になり、横走する平行沈線が脣下半部にまで施文される。

(3) 器形は、四単位の波状縁でキャリバー形を呈するものが圧倒的多数を占める。新しい時期の土器ではキャリバー形の彎曲が強まる点も浮線文系土器の場合と同様である。

(4) モティーフも、浮線文系土器との類似が顯著である。

前述の各分類の記述を見る限りでは、A～C 群の各「系」は、各々固有の時間的位置を占めているようにみえる。しかし、實際には、一遺跡における各「系」の割合には、時間的要因だけでは説明しきれない差異が認められる。A 群の衰退にともなって B 群が増加する、という大まかな流れ

は動かし難いが、この転換期におけるC群の比率は、遺跡によって異なるようである。

第二に注目されるのは、組成の中でD群が占める割合の差異である。D群の土器に関しては、従来の編年研究では注目されることが少なく、その在り方には不明な点が多い。しかしながら、このうち、羽状縄文のみを有する土器については、中部山岳地帯においてその存在が顕著であるとする樋口の指摘(大場・麻生・樋口他一九五七)があり、時間以外に起因した相異の存在が予測される。

さらにつけ加えるならば、時間以外に起因する相異は、上記のA~D群の組成比率だけにあらわれることは限らない、という点が指摘される。前述のA~D群の分類は、編年網作成の際の便宜上、施文技法を基準として諸磯b式土器の分類を試みたものである。しかしながら、諸磯b式の分類を行なう際に用い得る基準としては、施文技法の他にも、文様構成、文様図形、用いられる施文具、器形、口縁部形態、口唇部形態、器面調整、縄文原体など、様々な属性を考えることができる。これらの諸属性にみられる差異は、編年研究においては時間的な変化を示すものとして理解されているが、個々の諸属性に注目してその在り方を検討した場合、時間的変化だけでは説明しきれない差異が認められるのである。

それでは、このような時間以外の要因による土器の相異とはどのようなものであろうか。「縄文土器における文様・形態の類似と相異」(羽生一九八四)において、筆者は、遺跡間の土器の類似度は、基本的には遺跡間のインター・アクションの強弱を反映する、という仮定を示し、一定の手順に基づいて時間差や機能差を除去した場合の土器の類似度を決定する主たる要因として、同時に存在した複数の居住集団間の交流と、同一居住集団の移動による結果、という二つをあげた。このような仮定に基づくならば、遺跡間の土器の類似度に検討を加えることによって、遺跡間の関係を復元することが可能になる。

そこで、本稿では、遺跡間の土器の類似度の検討を通じて、諸磯b式期における遺跡間の関係の復元を試みる。類似度の算定にあたっては、機能的な差異が比較的少ないと考えられる同一器種(深鉢形土器)に分析対象を限定し、土器の各属性における類似と相異に注目してそれらを重ねあわせてゆくという方法をとる。具体的には、諸磯b式の諸特徴を施文技法、文様構成などの属性に分解して属性の各々について分類項目を設定し、各分類項目の出現頻度を用いた統計的分析を行なう。その際、得られた変数のすべてを用いて機械的に類似度の比較を行なうのではなく、各変数の性格に検討を加えて、時間的変化が顕著な変数について

いてはこれを除去し、時間による影響を除去した形で類似度の比較を行なう。

### II 諸磯b式土器における属性の類似度について

#### 1 分析資料の選定

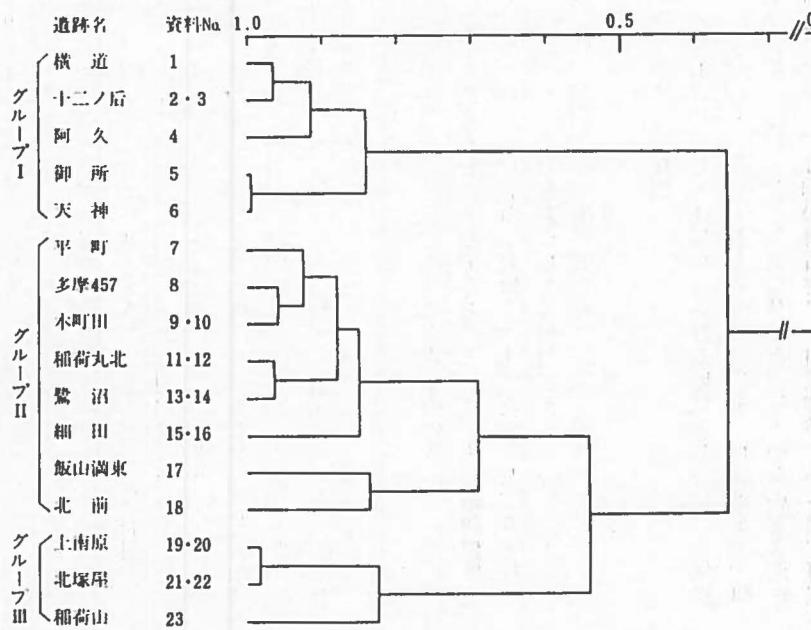
分析資料としては、廃棄・埋没時の同時性を推定し得る土器のセットとして、一住居址の覆土内から出土した一括資料を選んだ<sup>(1)</sup>。資料の選定にあたっては、時間差の除去を容易にするため、型式学的研究が進んでいる諸磯b(古)式、および諸磯b(古)式から諸磯b(中)式への移行期に属する資料を中心とした。これに、その後後に位置づけられる若干の資料を加えて、分析に足るサンプル数を確保し、資料群内に想定される時間幅を最小限に抑えた。

分析資料の作成にあたっては、(1)各分類項目に属する土器の出現頻度を算定するに耐え得るだけの口縁部個体数を有する、(2)型式学的にみて明らかに他時期の資料と認められるものが多量に混入していない、という二点を条件とし、現在までに発掘調査と報告書刊行が行なわれている該当期の資料で使用可能なものは、できる限り分析資料に含めた。ただし、今回の分析では、遺跡間の関係の検討を行なうことが主目的であるため、一遺跡から作成する資料

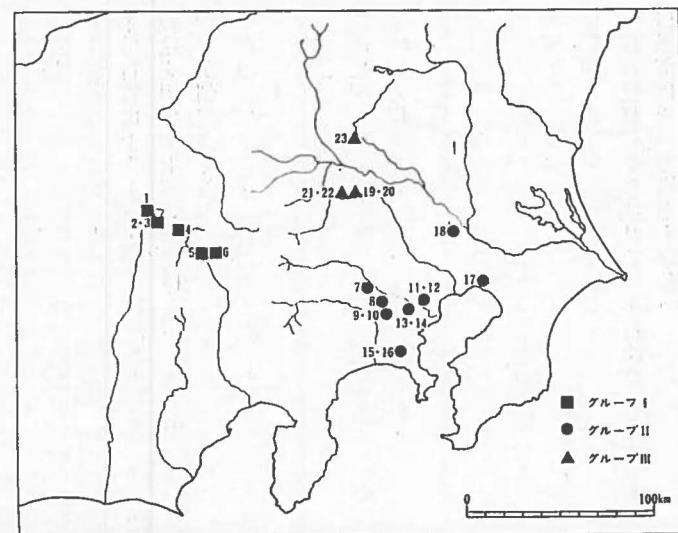
は二資料(住居址二軒分)までとした。なお、(2)で問題とした他時期資料の混入に関しては、少量の場合には、その個体を除外して集計を行なう、という形で処理し、分析資料として採用した。

以上のような条件を考慮に入れた上で、本稿では、十六の遺跡、二十三の遺構から得られた一括出土土器を、最終的に分析資料として選定した。第1表に、その資料名を示す。ここに示した資料のうち、無印のものについては、実際に全出土資料を観察し、データの作成を行なった。また、※印が付されている資料については、報告書に掲載されている図版からデータを作成した。

次に、こうして選定した資料の各々に関して、口縁部破片に基づいた個体認定を行なった。個体認定に際しては、全口縁部破片を対象とし、接合ないし同一個体と認定できたものに対しては全体で一個体、それ以外のものについては、一片を一個体とした。ただし、口縁からの長さが五センチメートル未満の口縁部破片に関しては、個体認定が不可能な資料であると考えて、これを除外した。そして、認定された各個体のうち、深鉢以外の器種と考えられるもの、および他時期に属する資料を除外し、最終的に残った資料を分析に用いる資料とした。第1表に、その口縁部個体数を示す。



第2図 遺跡間距離に基づいた遺跡のグルーピング



第3図 遺跡分布図 (数字は資料No.)

第1表 分析資料一覧

資料 No.	資料名	資料個体数
1	長野県横道遺跡3号住居址	36
2	長野県十二ノ后遺跡46号住居址	19
3	同 47号住居址	40
4	長野県阿久遺跡45号住居址	39
5	山梨県御所遺跡4号住居址	37※
6	山梨県天神遺跡C地点25号住居址	32
7	東京都平町遺跡1号住居址	49
8	東京都多摩ニユータウンNo.457遺跡3号住居址	22
9	東京都本町田遺跡A地点J-1号住居址	18※
10	同 J-4号住居址	42※
11	東京都稻荷丸北遺跡5号住居址	55※
12	同 11号住居址	15
13	神奈川県鶯沼遺跡1号住居址	47
14	同 7号住居址	58
15	神奈川県細田遺跡5号住居址	43※
16	同 9号住居址	58※
17	千葉県飯山満東遺跡4号住居址	24※
18	千葉県北前遺跡1号住居址	26
19	埼玉県上南原遺跡7号住居址	13
20	同 8号住居址	29
21	埼玉県北塚屋遺跡12号住居址	37
22	同 23号住居址	17
23	群馬県稻荷山遺跡15号住居址	13※

第2表 分析に用いた変数一覧

- $x_1$  = 区画文が沈線文であるものの個体数／有文土器の個体数
- $x_2$  = 区画文が刺突文であるものの個体数／有文土器の個体数
- $x_3$  = 区画文が浮線文であるものの個体数／有文土器の個体数
- $x_4$  = 縦文のみ、および無文のものの個体数／総個体数
- $x_5$  = 横位区画文のみを有するものの個体数／総個体数
- $x_6$  = 波状文を有するものの個体数／総個体数
- $x_7$  = 肋骨文・木葉状文・幾何状文を有するものの個体数／総個体数
- $x_8$  = 曲線文・蕨手文・渦巻文を有するものの個体数／総個体数
- $x_9$  = 平縁であるものの個体数／総個体数
- $x_{10}$  = 四単位波状縁であるものの個体数／総個体数
- $x_{11}$  = 口縁部が外反ないし外傾するものの個体数／総個体数
- $x_{12}$  = 口縁部が内轉ないし内屈するものの個体数／総個体数
- $t$  = 諸磯 b(中)式に比定されるものの個体数／総個体数

## 2 予測される遺跡グループの設定

従来の編年研究の成果によれば、諸磯 b 式土器にみられる差異のうち、時間差以外に起因するものは、地域の差によるとする考えが多いようである。そこで、分析資料として選んだ十六の遺跡に関して、遺跡間相互の距離を变数としてクラスター分析を行ない、その結果に基づいて三つの地域グループを設定した。これらのグループを、上から、グループ I (山梨・長野地域)、グループ II (東京・神奈川・千葉地域)、グループ III (埼玉・群馬地域) と呼んでおく(第2図・第3図)。

ここに示した地域区分は、遺跡間相互の距離に基づいて設定した地理的な区分であり、考古学的資料の解釈からは独立して設定されたものである。これを、土器の類似度を検討する際に予測される遺跡グループとみなす。6で行なう分析では、これに基づいて各資料を予め三つのグループに分け、判別分析を用いてその妥当性を検討する。

## 3 データの作成

諸磯 b 式の深鉢形土器にみられる属性としては、文様構成、文様图形、用いられる施文具、器形、口縁部形態、口唇部形態、器面調整、縄文原体など、様々のものが考えられる。しかし、今回の分析では、口縁部破片から推定可能

で、かつ拓本図からも読みとれる属性に限定して、変数の選定を行なつた。その結果を以下に示す。

## 属性 1 施文技法 (主文様帶の上端区画文様の施文技法)

- (a) 区画文が沈線文であるもの

半截竹管による平行沈線文技法およびその他の沈線文技法を用いて上端区画文様を施したもの

- (b) 区画文が刺突文であるもの

半截竹管による連續爪形文技法およびその他の刺突文技法を用いて上端区画文様を施したもの

- (c) 区画文が浮線文であるもの

器面に細い粘土紐を貼付する、浮線文技法を用いて上端区画文様を施したもの

## 属性 2 文様構成

- (a) 縄文のみおよび無文のもの

器面の全面ないし一部に縄文のみが施されるもの、および無文のもの

- (b) 横位区画文のみを有するもの

明確な文様帶を形成せず、平行沈線文や連續爪形文が口縁部に沿って横走するもの

- (c) 波状文を有するもの

胴上半部文様帶が胴下半部の縄文帯ないし無文帯と明

第3表 各分類項目毎の土器の出現頻度

分類 No.	x <sub>1</sub>	x <sub>2</sub>	x <sub>3</sub>	x <sub>4</sub>	x <sub>5</sub>	x <sub>6</sub>	x <sub>7</sub>	x <sub>8</sub>	x <sub>9</sub>	x <sub>10</sub>	x <sub>11</sub>	x <sub>12</sub>	t
No. 1	0.391	0.130	0.478	0.361	0.028	0.000	0.056	0.528	0.250	0.722	0.194	0.806	0.528
No. 2	0.294	0.118	0.588	0.105	0.053	0.000	0.000	0.632	0.211	0.737	0.211	0.789	0.737
No. 3	0.206	0.559	0.235	0.150	0.075	0.000	0.225	0.300	0.500	0.450	0.525	0.475	0.350
No. 4	0.091	0.909	0.000	0.436	0.333	0.000	0.205	0.000	0.897	0.103	1.000	0.000	0.000
No. 5	0.367	0.267	0.367	0.189	0.054	0.000	0.000	0.351	0.459	0.514	0.297	0.703	0.459
No. 6	0.789	0.000	0.211	0.406	0.000	0.000	0.063	0.438	0.063	0.938	0.063	0.938	0.563
No. 7	0.689	0.178	0.133	0.082	0.000	0.020	0.367	0.102	0.510	0.449	0.635	0.367	0.327
No. 8	0.706	0.294	0.000	0.227	0.045	0.091	0.545	0.000	0.909	0.091	0.955	0.045	0.000
No. 9	0.556	0.333	0.111	0.000	0.056	0.056	0.667	0.111	0.833	0.167	0.833	0.111	0.111
No. 10	0.730	0.243	0.027	0.119	0.048	0.024	0.595	0.024	0.976	0.000	0.881	0.048	0.048
No. 11	0.500	0.042	0.458	0.127	0.000	0.000	0.309	0.491	0.164	0.727	0.255	0.745	0.655
No. 12	0.462	0.538	0.000	0.133	0.067	0.133	0.467	0.000	0.800	0.067	1.000	0.000	0.000
No. 13	0.349	0.651	0.000	0.085	0.000	0.043	0.681	0.000	0.745	0.021	0.979	0.021	0.000
No. 14	0.392	0.373	0.118	0.121	0.034	0.000	0.431	0.121	0.638	0.310	0.741	0.259	0.190
No. 15	0.476	0.310	0.214	0.023	0.047	0.023	0.698	0.163	0.791	0.093	0.744	0.256	0.186
No. 16	0.673	0.127	0.200	0.017	0.017	0.017	0.552	0.224	0.603	0.241	0.707	0.293	0.224
No. 17	0.565	0.435	0.000	0.042	0.042	0.375	0.417	0.000	0.875	0.125	1.000	0.000	0.000
No. 18	0.192	0.385	0.423	0.000	0.000	0.000	0.346	0.462	0.308	0.692	0.462	0.538	0.462
No. 19	0.462	0.538	0.000	0.000	0.000	0.462	0.385	0.000	0.692	0.000	1.000	0.000	0.000
No. 20	0.655	0.345	0.000	0.000	0.103	0.241	0.586	0.000	0.793	0.000	1.000	0.000	0.000
No. 21	0.429	0.571	0.000	0.243	0.135	0.324	0.243	0.000	0.811	0.189	1.000	0.000	0.000
No. 22	0.294	0.706	0.000	0.000	0.000	0.294	0.294	0.000	0.647	0.000	1.000	0.000	0.000
No. 23	0.385	0.615	0.000	0.000	0.154	0.154	0.692	0.000	0.923	0.077	1.000	0.000	0.000

確に区分され、胴上半部文様帶内には波状、鋸歯状の文様が施されるもの。

(d) 肋骨文、木葉状文、幾何状文を有するもの

確に区分され、胴上半部文様帶ないし無文帶と明

状、幾何図形状の文様が施されるもの。

(c) 曲線文、歟手文、渦巻文を有するもの

胴上半部文様帶の下限が不明確になり、平行沈線ないし浮線が数段にわたって横走し底部付近にまで至り、

横位区画内には曲線状、歟手状、渦巻状の文様が施されるもの。

第4表 変数間の関係

$x_7$	$x_8$	$x_9$	$x_{10}$	$x_{11}$	$x_{12}$
-0.637-	-0.906--				
0.695++	0.924++	-0.936--			
-0.707--	-0.954--	0.923++	-0.956--		
0.673+	0.954++	-0.933--	0.960++	-0.998--	
-0.686--	0.973++	-0.928--	0.948++	-0.974--	
-0.651-					0.974++

	$x_1$	$x_2$	$x_3$	$x_4$	$x_5$	$x_6$
$x_1$						
$x_2$	-0.612-					
$x_3$	-0.227	-0.624-				
$x_4$	-0.072	-0.053	0.138			
$x_5$	-0.400	0.576+	-0.304	0.400		
$x_6$	0.083	0.411	-0.569-	-0.338	0.000	
$x_7$	0.319	0.207	-0.578-	-0.599-	-0.035	0.153
$x_8$	-0.162	-0.652-	0.972++	0.244	-0.318	-0.567-
$x_9$	0.084	0.607+	-0.832--	-0.265	0.450	0.418
$x_{10}$	-0.057	-0.645-	0.849++	0.402	-0.295	-0.539
$x_{11}$	0.008	0.721++	-0.898--	-0.362	0.354	0.606+
$x_{12}$	-0.025	-0.707--	0.898++	0.367	-0.350	-0.593-
$t$	-0.081	-0.701--	0.947++	0.249	-0.347	-0.591-

(++と--は1%水準で、+と-は5%水準で、それぞれ有意な相関を示すもの)

現頻度を求める際の母数は、属性1の諸変数についてでは、縄文以外の文様を有する土器の中での各々の割合が問題になると考へ、これを母数とした。他の属性に関しては、各資料の総個体数を母数とし、出現頻度の算定を行なった。なお、データ作成の段階で、属性3分類項目(c)(二単位波状縁であるもの)の出現頻度は、0の値をとるもののが多く、類似度の検討に用いる変数としては不適当であることがわかった。そこで、これを除いた十二の変数を、最終的に分析に用いる変数とし、 $x_1 \sim x_{12}$ と呼ぶことにする。

さらに、実際に類似度の検討を行なうにあたっては、その前段階として時間的変化を除去するために、時間をあらわす指標が必要である。本稿で分析対象とした二十三の資料は、主として諸磯b(古)式、および諸磯b(古)式から諸磯b(中)式への移行期という、比較的狭い時間幅の中に位置づけられるものであるから、各資料における諸磯b(中)式比定土器の割合を調べることによって、大まかな時間的位置づけを知ることが可能である。そこで、前述のような各属性毎の分類とは別個に、全体としての特徴から各個体の型式比定を行ない、各資料における諸磯b(中)式に比定される土器の出現頻度を求め、これを時間をあらわす変数tとした。

の値を第3表にそれぞれ示した。

#### 4 变数間の関係の検討

本稿の目的は、時間差を除去した場合の各資料間の類似度を比較することであるが、前節で得られた  $x_1$  ～  $x_{12}$  の变数の中には、時間に強く影響されている变数も存在することが予測される。そこで、実際に類似度の検討を試みるに立ち、变数間の関係を調べることを目的として、 $x_1$  ～  $x_{12}$  や  $t$  および  $t$  という十三の变数の間の相関係数を求めてみた。その結果は第4表に示した。

これに明らかなように、各变数の现れ方は完全に独立ではなく、いくつかの变数の間には、1%の危険率で有意な相関関係が認められた。变数  $t$  との相関でいえば、1%の危険率で、 $x_3$ 、 $x_8$ 、 $x_{10}$ 、 $x_{12}$  は  $t$  と有意な正の相関を示し、 $x_2$ 、 $x_9$ 、 $x_{11}$  は  $t$  と有意な负の相関を示している。すなわち、 $x_2$ 、 $x_3$ 、 $x_8$ 、 $x_{10}$ 、 $x_{11}$  の七つの变数は、時間的变化と非常によく合致した動きを示していることがわかる。以上の結果に基づき、上記の七つの变数に関しては、強く時間と相關する变数であると考える。本稿の目的は、前述のように時間差を除去した場合の各資料間の類似度を検討することであるから、以上の七つの变数は、類似度の検討を行なう際のデータからは除外する。

残る五つの变数のうち、 $x_6$  と  $x_7$  については、5%の危険率で  $t$  と有意な负の相関が認められた。これらの变数については、ある程度時間と相關する可能性も考えられるが、今回の分析では、時間以外の要因による影響をより強く受けている变数と考えた。また、 $x_1$ 、 $x_4$ 、 $x_5$  については、 $t$  との有意な相関が認められなかつた。そこで、これら五つの变数を、時間以外の要因を反映する变数と考え、類似度に関する分析のデータとした。

#### 5 土器の類似度に基づいた地域的遺跡グループの存在の確認

以上の条件下に基づいて選定した变数を用いて資料間の類似度の在り方を検討するために、全資料を遺跡間距離に基づいて予め三つの地域グループに分け（II-2参照）、 $x_1$ 、 $x_4$ 、 $x_5$ 、 $x_6$ 、 $x_7$  の五つの变数を用いて各グループ間の判別分析を行なつた。

ここで用いた判別分析とは、簡単にいえば、複数の变数に関するデータを用いて、二つのグループにわかれると予測される複数の資料を実際に二つのグループに分けてみる手法である。この場合の対立仮説は、「各資料は予め行なった帰属指定のとおりには判別されない」となる。分析の結果が帰属指定のとおりに判別されれば、この仮説は棄却

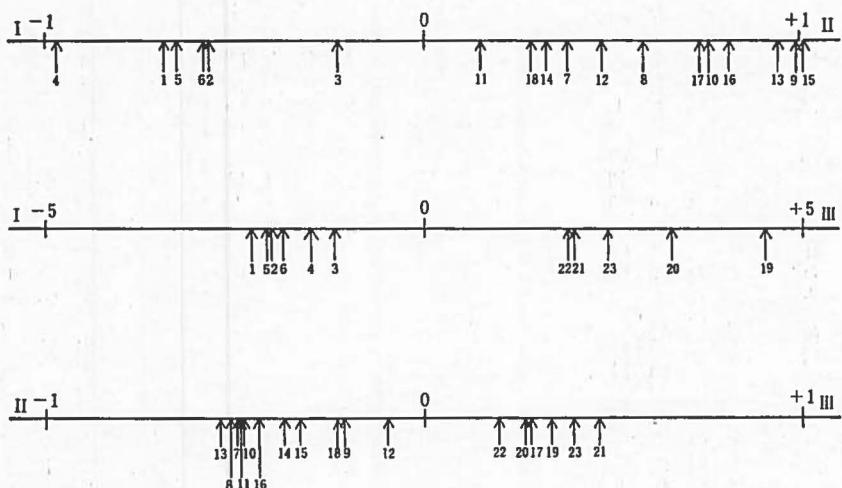
第5表 各地域間の判別係数、マハラノビスの距離

	$x_1$	$x_4$	$x_5$	$x_6$	$x_7$	マハラノビスの距離
I-II	-0.265	1.112	1.392	-0.827	-2.006	19.681**
I-III	-1.370	2.344	-2.364	-11.900	-4.308	50.948**
II-III	0.332	1.435	-4.348	-1.482	0.597	9.981*

(\*\*は1%水準で有意、\*は5%水準で有意)

第6表 グループIとグループIIにおける判別関数值と、他グループに対する遺跡間距離との順位相関係数

グループ名	Spearman's r	資料数
I	-0.186	6
II	-0.325	12



第4図 各遺跡の判別関数值（数字は資料No.）

される。上記の対立仮説は、「全資料は帰属指定のとおりに二つのグループに分かれる、という予測は間違いである」ということを意味するから、対立仮説が棄却された場合は、予測は間違いとはいえない、という結論が得られたことになる。この場合には、各変数の値は、各地域グループ毎に類似した傾向を示していると考えることができる。

第5表と第4図は、グループI、グループII、グループIIIの三つの資料グループについて、各々、二群間の判別分析を行なった結果を示したものである。結果としては、グループII-III間に類似した傾向を示していると考えることを考えることができる。

分析の結果得られた判別係数をみると、グループIに関しては $x_4$ 、グループIIに関しては $x_1$ 、 $x_7$ 、グループIIIに関しては $x_5$ 、 $x_6$ の各係数が、他のいずれのグループとの判別においてもプラスの値を示している。したがって、これらの変数は、各グループにおいて他グループよりも相対的に高い出現頻度を示している変数として理解し得る。逆に、他のいずれのグループと比較した場合にもマイナスの値を

第6表は、グループIとグループIIの間の判別分析において得られた判別閾数値を用いて、他グループに対する判別

閾数値の近さと遺跡間距離の近さの各々について順位づけを行ない、その間に順位相関が認められるか否かを調べたものである。判別閾数値の順位付けは、第4図に示した分析結果に基づいて、各グループの内で他グループ側に値が近い順に1、2……とした。また、遺跡間距離の位置づけは、両グループ間の最短距離を示す遺跡を基点として、他グループの各遺跡を、これに近い順に1、2……とする方法をとった。ただし、同一遺跡から得られた二組の資料については、同一順位と考え、二つの順位の平均を用いた。なお、グループIIIに関しては、遺跡数が少ないため、順位相関の検討を行なうのに適した資料ではないと判断し、今回の分析対象には含めなかった。

結果は、グループI、グループIIのいずれについても、両者の順位の間に有意な相関は認められなかつた。したがつて、グループIとグループIIに関しては、各資料の判別閾数値と、各遺跡の他グループに対する地理的遠近との間にには、明確な結びつきは認められないと考えることができる。

示している変数——グループIの $x_1$ 、 $x_6$ 、 $x_7$ 、グループIIの $x_5$ 、グループIIIの $x_4$ ——については、各グループにおいて、他グループよりも相対的に低い出現頻度を示している。変数と考えることができる。また、各グループ間の判別閾数の有意性の検定を行なったところ、グループI-II、グループI-III間では一九・六八一、グループII-III間では九・九八一であるのに対し、グループI-III間では五〇・九四八と、前二者に比して著しく大きな値を示している。このような結果は、グループI-III間の差異が、グループI-II、グループII-III間の場合と比べて著しく大きいことを意味する。

次に、各地域グループ内における類似度の在り方について検討する。上記の判別分析は、全資料を三グループに大別した上で各グループ毎に共通する傾向が認められるか否かを確認したものであり、これらのグループの内部においてさらに細かな地域差が存在する可能性を否定するものではない。そこで、得られた判別閾数値を用いて、各地域グループ内における類似度の在り方を検討してみた。

以上に示した分析を通じて得られた結論をまとめてみると、次のようになる。

- (1) 分析のための基礎データとして選定した $x_1$ ~ $x_{12}$ の十二個の変数には、時間をあらわす変数 $t$ と強い相関を示すものと、強い相関が認められないものがある。
- (2) 分析資料を、遺跡間距離に基づいて予め三つの地域グループに分け、 $t$ と強い相関が認められなかつた五つの変数を用いてそれぞれ二群間の判別を行なつたところ、各グループは、一資料を除いて予測したグループのとおりに判別された。したがって、各資料は、各地域グループ毎に類似した傾向を示していることが統計的に確認された。

(3) グループI-II間の判別分析について、他グループに対する判別閾数値の近さと遺跡間距離の近さの各々について順位づけを行ない、両者の順位相関の有無を調べたところ、いずれのグループにおいても有意な相関は認められなかつた。すなわち、グループI-II間の判別における各資料の判別閾数値と、他グループに対する各遺跡の地理的遠近との間に明確な結びつきは認められなかつた。

### III 考察

1 変数の性格と土器の類似度のあらわれ方について

前章の分析の目的は、時間以外の要因に強く支配される变数に基づいた土器の類似度の比較にあつたため、時間的要因に強く影響をうけていると考えられる变数を除去した上で、残りの变数を用いて資料のグループングを行なうという方法をとった。この際、時間的変化を強く示すと考えて除去した变数は七变数であった。筆者が今回の分析のために設定した变数は全部で十二であつたから、ここで選んだ土器の諸特徴のうちの約六割は時間的変化を強く反映しているということになる。

以上のような結果は、一土器型式の分布圏内においては、土器の有する諸特徴のかなりの部分が時間軸に沿って変化している可能性を示唆するものである。すなわち、今回分析において筆者が地域的遺跡グループの抽出に用いたような、時間以外の要因を反映する变数は、諸磯式にみられるヴァリエーションの主体を占めるものではないことがわかる。

次に、 $t$ との強い相関が認められなかつた五つの变数に基づいた類似度のあらわれ方について考えてみる。前章の分析の結果、各資料は、遺跡間距離に基づいて設定された

地域グループ毎に類似した特徴を有することが確認された。このことは、時間差を除去した場合の土器の諸特徴のうちには地域的なまとまりがみられることを示すものである。

それでは、抽出された地域グループは、どのような性格を有するものであろうか。筆者は、I-2において、同時に存在した複数集団間の交流と、同一居住集団の移動、という二点が、土器の類似度を支配する主たる要因である、とする考え方を示した。このような仮定に基づくならば、各地域グループの内部においては、いくつかの居住集団が存在し互いに緊密な交流を行なつてゐたという可能性とともに、各地域グループの内部において頻繁な移動が行なわれていた可能性を検討する必要がある。

縄文時代の居住形態に関しては、各集落は基本的には定住的な性格を有するものであるとする考え方（向坂一九六八・一九七〇、水野一九六九）と、短期間の移動を繰り返していた（石井一九七七・一九八三）とする、二つの考え方が発表されている。ここで、このような二つの居住形態のいずれかがとられた場合の土器の類似度のあらわれ方を想定してみよう。水野や向坂のように、各遺跡に対する定住性を強調する視点に立てば、一遺跡イコール一居住集団と考えることになるから、遺跡間の土器の類似を、同一居住

一プ内における地域差は認められなかつた。このような分析結果は、居住形態に関する後者の立場——すなわち、同一集団の広範囲な移動を認める立場——を支持するものである。同時に、このような結果は、縄文時代における各居住集団の移動範囲がかなり広域にわたつていた可能性を示すものと考えることができる。

#### 2 各地域グループ間の関係の時間的変化

IIで行なつた分析は、土器にみられる時間的変化を除去した上で類似度を比較することを試みたものである。このような方法は、前節に示したような細かな議論を行なう際には有効であるが、類似度の時間的変化に関する検討を行なうことができないという問題がある。そこで、本節では、編年研究の立場からみた土器のマクロな地域差の在り方を検討することにより、各地域グループ間の関係について考える。

前章の分析の結果として得られた三つの地域設定（山梨・長野地域、東京・神奈川・千葉地域、埼玉・群馬地域）を軸として、従来の編年研究の成果に基づいて前期後半における土器の在り方を概観した場合、各地域間の土器の類似と相異の在り方には、時期によって変化が認められることが知られている。前期中葉の関山式の場合、埼玉・群馬

地域では典型的な関山式が普遍的に認められるのに対し、山梨・長野地域では、いわゆる関山式とは非常に異なつた、薄手で纖維を含まない関山併行期の土器群が中心的な存在を占める（長野県中央道遺跡調査団編一九八二、など）。以上のような傾向は、次の黒浜式期の土器群にも引き継がれるが、諸磯<sup>a</sup>式期になると、山梨・長野地域特有の薄手の土器の割合は減少し、文様構成等において一部に異なった土器が認められるものの他地域との類似は大きくなれる。このような齊一化の動きは、諸磯<sup>b</sup>式期にはいつそう強まり、前章の分析で示したように、土器に認められる差異のかなりの部分はミクロな時間差として説明できることになる。諸磯<sup>c</sup>式期に関しては、関東地方における住居址に関しては、一部を除き山梨・長野地域と非常に類似して

このような時間的変化の中で、前章で扱った諸磲 b 式期を考えてみると、この時期は、各地域間に強い齊一性が認められるようになつた時期であることがわかる。土器の類似度はインターーアクションの強弱を反映する、と考える立場に立つた場合、上記のような傾向は、諸磲 b 式期における各地域間の緊密な関係を反映していると考えることが可能である。同時に、各地域間の土器の類似と相異の在り方

られる時期としては、後期初頭の称名寺式期があげられる。これに関するて、今村啓爾は、遺跡数の減少と人口の減少との関連を想定し、「関東地方では縦文時代の人口は草創期から早期・前期・中期とゆるやかに高まり後期には停滞し、晚期に入つてから何らかの原因で減少に転じ、弥生時代へ受けがれる」という「多くの研究者のいだいている漠然としたイメージ」に疑問をなげかけ、縦文時代には人口の増減が何回も繰り返されたのではないか、とする考え方を示している(今村一九七七a、下四五頁)。遺跡数の減少をこのように考える立場をとるならば、諸磕式と式ノ三菩提式期には関東地方の人口が著しく減少した、とする解釈が成り立つことになる。さらに、この時期の山梨・長野地域における遺跡数の増加を考えあわせるならば、関東地方から中部山岳地帯への大規模な人口移動の可能性も考慮されることになろう。

3 縄文時代の生業と居住形態

以上、前章で得られた分析結果の検討を中心として、諸磯 b 式期の居住形態の復元を試みてきた。これらの検討を通じて浮かび上がってきたのは、当時の生活が、従来の縦文時代研究において考えられていたよりもはるかに移動性に富むものだったのではないか、ということである。この

のような移動が、一年の周期の中における季節的なものであったのか、石井が主張するように数年毎のものであったのか、あるいは両者の複合であったのか、等の問題に關しては、ベース・キャンプとキャンプ・サイトといった各遺跡の性格づけの問題も含めて、別角度からの検討が必要であろう。しかし、いずれにせよ、このような非定住的な居住形態の在り方は、そのまま彼らの生活の特徴であったと考えることは可能である。

のような移動が、一年の周期の中における季節的なものであったのか、あるいは両者の複合であつたのか、等の問題に關しては、ベース・キャンプとキャンプ・サイトといった各遺跡の性格づけの問題も含めて、別角度からの検討が必要であろう。しかし、いずれにせよ、このような非定住的な居住形態の在り方は、そのまま彼らの生活の特徴であつたと考えることは可能である。

縄文時代の居住形態については、和島誠一以来、完全に定住とはいえないにせよ、かなり高い定住性を有していたのではないか、とする見解が一般的であった（和島一九四八・一九六二）。その根拠としては、南墻貝塚をはじめとする馬蹄形大集落の存在等があげられている。このような和島の立場は、「進んだ」採集・狩猟民である縄文時代人は、一般の採集・狩猟民——移動生活者——よりも「進んだ」居住形態——定住——を示すはずである、というものであり、その背後には、旧石器時代から新石器時代への変化を、移動から定住へ、といった単純で一方向的な文化進化と捉え、縄文時代をこのようないくつかの変化の中に位置づけようとする視点がうかがえる。

示している。このような遺跡分布の変化を考慮に入れた場合、前章の分析で扱った時期は、遺跡分布に大きな変化がみられはじめた時期であったことがわかる。したがって、土器にみられる前述のような高い斉一性は、このような遺跡分布の変化と何らかの関連を有している可能性がある。

繩文時代の関東地方の中で、同様の変化が認められる。

にこのような時間的変化が認められるという事実は、前章の分析で示したような各地域グループの枠組は、限られた時間の中においてのみ有効な区分であり、各地域間の関係は流動的な要素を含んでいたことを示すものである。

ず、諸外国の文化史的考古学に共通のものであった。しかしながら、一九六〇年代に入り、従来の伝統的な考古学に対する再検討の声が高まる中で、採集・狩猟民の位置づけについても、民族誌的研究の立場から多くの疑問が提出された。リーは、

狩猟・採集民に対する現代人類学の見方は、二つの疑わしい仮定の上に成り立っている。第一は、狩猟・採集民の生活は動物の狩猟に依存している、とする考え方であり、第二は、彼らの生活様式は、一般に、生存のための不安定かつ困難な苦闘である、とする仮定である (Lee 1968 p. 30)。

と述べた上で、採集・狩猟民に関する従来の固定観念に疑問を表明し、この問題に対応するひとつのアプローチとして、アフリカ、カラハリ砂漠におけるクン・ブッシュマンの食料獲得活動を観察・分析した。その結果として、彼らの生活は、「飢餓に脅かされた不安定な生活」といった從来の固定観念からはほど遠く、余暇に満ちた、安定性の高いものであることが明らかになった。さらにサーリンズは、このような採集・狩猟民の実態をふまえた上で、

狩猟・採集という経済的実践の、ほんとうの障害は何であろうか。現存するその社会の実例からわかるように、それは《労働生産性の低さ》ではない。そうではなくて、この経済は、切迫した収穫過減によって、ひどく悩まされているのである。……あまり人数が多くなれば、やかれ、通常減少してしまうだろう。そうすると人々は、留まっているかぎり現実コストを増大させるか、現実収益を低減させるかという板挟みの窮状におちいらざるえない。……どこか他のところへおそれれば、有利な条件で生産を維持してゆくために、この経済的移動が不可欠とされるのである (Selvin 1975 山内訳四六一四七頁)。

と述べ、不定住性が採集・狩猟経済にとって重要な要素である点を指摘している。

このような採集・狩猟民に対する知見の変化を考慮に入れた場合、「進んだ」採集・狩猟民であつた縄文時代人が、一般的の採集・狩猟民よりも「進んだ」居住形態——すなわち定住的な居住形態——を有していた、と単純に考えるわ

結果の考察を通じて、土器の研究が縄文時代の遺跡間の関係を考える際のひとつのがかりとなり得ることが示された。

#### IV 要 約

以上、縄文時代前期後半の諸磯b式土器を材料として、土器の類似度は遺跡間の関係の検討に役立ち得る、との視点から、時間差をできる限り除去した場合の遺跡間の土器の類似度に関する分析を行ない、その結果に考察を加えてきた。方法としては、一土器型式を構成する諸属性の各々について分類項目を設定し、各資料毎にその出現頻度を算定して、これを各資料の特徴をあらわす変数とした。次に、時間的変化との関係において各変数の性格を検討し、全変数を、時間的要因に強く影響されているものと、時間以外の要因を反映していると考えられるものの二者に分類した。そして、後者の変数を用いて、中部山岳地域、南関東地域、北関東地域という三つの地域グループ間の判別分析を行なった。結果として、各資料は、地域グループ毎に類似した傾向を示していること、しかし、各グループ内における資料間の類似度と遺跡間距離との間には明確な結びつきは認められないことが明らかになった。さらに、分析

こと自体が採集・狩獵民の文化発達の疎外要因ではなかつたと考えられる。かかる居住形態の移動性が、縄文時代の居住形態の復元において顕著に見出されたということは、きわめて納得のゆく結果といえる。

## 謝辞

本稿は、慶應義塾大学文学研究科に提出した一九八三年度修士論文の後半部分に基づき、一部を増補したものである。作成にあたり、つきの諸氏、諸機関から、資料の閲覧について御快諾をいただいた。

岡谷市教育委員会、川崎考古学研究所、山梨県立考古博物館（以上、未発表資料）、神奈川県教育委員会、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、財團法人東京都埋蔵文化財センター、諏訪市教育委員会、野田市郷土博物館、原村教育委員会、町田市立博物館、和田哲 次の諸先生、諸氏からは暖かい御指導・御助言をいただいた。

樋口昇一、鈴木公雄、近森正、小川英雄、阿部祥人、高山博、川島雅人、小澤かおる、出居博、桜井準也 また、資料の作成にあたっては、斎藤弘美、出居明子両氏に御助力いただいた。末筆ながら、これらの方々に深く感謝の意を表する。

（1）近年、長野県阿久遺跡の発掘調査によって、諸磯<sup>a</sup>式期の住居址十二軒と諸磯<sup>b</sup>式期の住居址二軒が検出され、中部山岳地帯における該当期の土器の在り方の一端が明らかになった。報告書中でも、諸磯<sup>a</sup>式の古い段階（報告書中のIV-a期）には、この地方独特の、縄文のみを有する薄手の土器が共伴すること、関東地方とは異なる種類の文様が多くみられること、等の指摘がなされている（百瀬一九八一）。しかし、諸磯<sup>a</sup>式の新しい段階から諸磯<sup>b</sup>式における地域差については、現在のところ、ほとんど明らかにされていない。

（2）図の出典・1・2——持田春吉氏の御好意により、川崎考古学研究所蔵の資料を実測させていただいた、3——村田他一九七九、4——市川他一九八四、5——川島他一九八一、6——白石一九八一、7・9——中島他一九八〇、8——長野県中央道遺跡調査団編一九八二

（3）厳密にいえば半截および多截竹管とすべきであるが、ここでは両者の総称として半截竹管という語を用いる。

（4）本群の土器では、爪形文間の隆起部分に刻み目を施す場合がある。これを浮線文の起源とする見解もあるが（中島一九八〇）、筆者は、これは本群の土器においては付加的な文様要素であると考え、次に示す浮線文土器とは区別して扱う。

（5）このような考え方、この時期の土器は特定の土器製作集団によって作られたのではなく、各居住集団毎に土器製作が行なわれたことを前提とするものである。

## （6）分析対象を单一器種に限定することによって機能差を除去

し得るか、という問題は、さらに議論する必要がある。しかしながら、諸磯<sup>b</sup>式の浅鉢形土器については、「赤色塗彩がみられたり、丁寧な作りの土器が多い、等の諸特徴から考へて、金井が主張するように深鉢形土器とは異なった機能を有していた可能性が高い、（2）各遺跡における出土絶対量が少なく、これを対象として組成比の比較を行なうことは困難である、という二点の理由により、今回の分析対象からは除外した。

## （7）一住居址の覆土内から出土した一括資料に同時性を認めるのは、あくまでも作業を進めるための仮定である。つまり、

ここでいう一括資料とは、資料を扱つ際にある単位的なまとまりとして筆者が選んだ基準であり、その中に異なる時期の土器が混入している可能性を否定するものではない。

（8）諸磯<sup>b</sup>式の細分型式名に関しては、今村啓爾の分類（今村一九八〇）に従つた。

（9）クラスター分析とは、「異質なものの混ざりあつて、いくつかの集落（クラスター）に分類する方法」（田中、脇本一九八三、二二九頁）である。クラスター分析の手法としては、群平均法を用いた。これは、それぞれのクラスターに属するサンプルの可能なすべての対の間の類似度の平均により両クラスター間の類似度を定義するものである。計算は、あたっては、NECのPC-9801Fを利用した。また、

## 縄文土器の類似度

## 分析プログラムは、渡・岸一九八一所収のものを用いた。

（10）判別分析とは、「いくつかの変数 $x_1, \dots, x_p$ に關して群ごとに得られている過去のデータ（サンプル）にもとづき、これららの変量の値から、個体がどの群に属するかを判別（予測）する方法」（田中・脇本一九八三、一〇一頁）である。使用

器機およびプログラム出典は註（9）に同じ。

（11）変数の数量値ではなく、その順位から、相関係数の計算を行なうもの。スピアマンの相関係数と呼ばれ、次の式で与えられる。

$$\rho = \frac{1 - \frac{6 \sum d^2}{n(n-1)}}{2}$$

$\rho$ ：相関係数

（12）このようないくつかの土器の性質こそ、型式学的な編年研究が、地域差等をある程度まで無視した形で行なわれ得る理由である。縄文土器を扱つたことのある考古学者であれば、この点はきわめて容易に理解できるであろう。

（13）この時期の東京・神奈川・千葉地域の土器に関しては、資料が少なく詳細は不明だが、埼玉・群馬地域と大略は同一の傾向を示すようである。

文献  
麻生優一 一九五八「長野県下水内郡南大原遺跡出土の土器」「考古学手帖」五、二頁  
藤森栄一 一九五〇「長野県岡谷市丸山遺跡の資料」「日本考古

学年報】三、五四頁

羽生淳子 一九八四「縄文土器における文様・形態の類似と相異

—遺跡相互間の関係の分析と復元にむけて—」「信濃」三

六一一〇、四九七六一頁

市川修他 一九八二「上南原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告

書第10集

同 一九八四「塚屋・北塚屋」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告

書第25集

今村啓爾 一九七七<sup>a</sup>「称名寺式土器の研究」「考古学雑誌」六

三一一、一七二九頁、同六三一、二二七六〇頁

同 一九七七<sup>b</sup>「伊豆七島における縄文前期の二遺跡の調査」第31回日本人類学会・日本民族学会連合大会レジ<sup>c</sup>、五六頁(人種学雑誌) 八六一<sup>d</sup> (一九七八年) 一二七頁に転載)

同 一九七九「諸磯式土器の施工工程の変遷」「日本人類学会

日本民族学会第33回連合大会研究発表抄録 三六頁 (人類学

雑誌) 八八一<sup>e</sup> (一九八〇年) 一四三、一四四頁に転載)

同 一九八〇「諸磯式土器の変遷と細分」「伊豆七島の

縄文文化」(武藏野美術大学考古学研究会) 四九七五二頁

同 一九八一「施文順序からみた諸磯式土器の変遷」「考古学研

究」二七一四、八六七九三頁

同 一九八三「諸磯式土器」「縄文文化の研究 第三卷 縄文土

器 I」(加藤晋平・小林達雄・藤本強編、雄山閣出版) 一一一

〜(二二三)頁

稻荷丸北遺跡調査団編 一九八三「稻荷丸北遺跡」(二九一・サ

イエンス社)  
石井寛 一九七七「縄文社会における集団移動と社会組織」「調  
査研究集録 第2冊」(港北ニュータウン埋蔵文化財調査団)  
一七四二頁同 一九八三「継続と移動」「縄文文化の研究 第八卷 社会・  
文化」(加藤晋平・小林達雄・藤本強編、雄山閣出版) 四九七  
五九頁金井正三 一九七九「縄文前期の特殊浅鉢形土器について」「信  
濃」三一一四、三五七五〇頁神田五六 一九五一「長野県下水内郡豊井村上今井南大原の前期  
縄文式土器遺跡」「信濃」三一八、四三七四九頁川崎純徳他 一九八〇「遠原貝塚の研究(本編I)」勝田市文化研  
究会川島雅人他 一九八一「N.457遺跡」「多摩ニユータウン遺跡  
九七二一四頁甲野勇・新井清・持田春吉他 一九六六「川崎市宮崎新鶴沼遺跡  
発掘調査報告書」高津國書館友の会郷土史古代班研究部・官崎久保田常晴編 一九六九「本町田」立正大学文学部考古学研究室  
調査報告第一冊 (二九一・サイエンス社)Lee, Richard B. 1968 "What hunters do for a living; or  
how to make out on scarce resources." In: Man the  
hunter, Lee, R. and I. DeVore (eds) Aldine publishing大場磐雄他 一九五六「信濃史料」一巻上・下 信濃史料刊行会  
大場磐雄・樋口昇一・麻生優他 一九五七「上原」長野県教育委  
員会<sup>f</sup>  
Sahlins, Marshall D. 1972 "Stone age economics." Aldine  
publishing company. (山内製紙) 一九八四 法政大学出版局

佐藤伝蔵・若林勝邦 一八九四「常陸國浮島村貝塚探査報告」

「東京人類学会雑誌」一〇一、一〇五頁

清藤一順他 一九七五「飯山満東遺跡」房總考古資料刊行会

白石浩之 一九八一「細田遺跡」神奈川県埋蔵文化財調査報告23

神奈川県教育委員会

同 一九八三「諸磯式土器の型式細分とその問題点」「人間・  
遺跡・遺物——わが考古学論集1」(麻生優編 文献出版) 一九

五七一〇七頁

鈴木徳雄 一九七九「諸磯式土器文様の変遷について」「白石城」

(鈴木徳雄・埼玉県遺跡調査会) 一〇八、一一〇頁

鈴木敏昭 一九八〇<sup>a</sup>「第IV群土器について——諸磯式土器の  
変遷」「足利遺跡」(鈴木敏昭他、久喜市教育委員会) 一一三、  
一二〇頁同 一九八〇<sup>b</sup>「諸磯式土器の構造とその変遷(再考)」「土曜  
考古」2 一二七二九頁

田中豊・脇本和昌 一九八三「多変量統計解析法」(現代数学社)

和田哲 一九六八「八王子市平町縄文前期遺跡」「古代」五一  
一三七三〇頁

和島誠一 一九四八「南堀貝塚と原始集落」「横浜市史」第一卷

原村その5 昭和51・52・53年度  
中島宏 一九八〇「諸磯式土器について」「伊勢塚・東光寺裏」  
(中島宏他、埼玉県教育委員会) 一七一、一七七頁  
中島宏他 一九八〇「伊勢塚・東光寺裏」埼玉県遺跡発掘調査報  
告書 26 埼玉県教育委員会  
中村正一他 一九八三「パソコンBASIC実践多変量解析法」  
(現代数学社)

縄文土器の類似度

二九・四六頁

- 同 一九六二「序説—農耕・牧畜発生以前の原始共同体」『古代史講座』II(学生社)二七—六頁  
若月省吾他 一九八〇「笠懸村稻荷山遺跡」笠懸村埋蔵文化財調査報告第3集 群馬県笠懸村教育委員会  
山梨大学考古学研究会編 一九八一「御所遺跡—第2次発掘調査報告書—」山梨大学考古学研究会調査報告第2集  
山内清男 一九三九「日本先史土器図譜」先史考古学会  
渡正堯・岸学 一九八一「多変量解析プログラム集」(工学図書)